

# スピリチュアルと心霊学

—近代日本における霊魂観—

金本拓士

## 1、はじめに

テレビをつけると、よく目にするのが江原啓之（以下、江原と略称）である。かれは、これまでの見方からするならば、霊能者という範疇に入るだろう。霊能者と言うと非常に胡散臭さがあり、かつて織田無道や宜保愛子の名前が思い出される。しかし、マスメディアのかれらと江原との扱いは大きく、胡散臭さや怪しい人物ではなく、非常に清潔感があり、万人受けするイメージを与えている。それは、かれがこれまで霊能者という肩書きではなく、「スピリチュアルカウンセラー」という、怪しさ、胡散臭さを微塵にも感じさせない名称を名乗っているところに依るところが大きいかもしれない。

実際にかれが本物の霊能者であって、本当に心霊界からの言葉が語られているのか、それともテレビの演出のせいかはわからない。たぶん、大槻教授がそこに出演するならば、そのイメージはガラッと変わるであろうが…。

さて、江原の発言や著作物に書かれている言葉をみてみると、この現実世界の外に霊界というものが存在し、人が亡くなった後、その霊魂は、霊界に移動し、そこで現世の我々とさまざまな形でコンタクトを取っているらしい。

江原のプロフィールを見てみると、彼は幼少の頃より霊が見え、そのためにずいぶん苦しめられていたとのことであるが、現在のように霊とコンタクトを取れるようになったのは、一つには「日本心霊科学協会」に所属する人物の影響であり、また彼自身、自分の霊能力を高めるためにイギリスへ行き、霊能者を育てる団体「英国スピリチュアリスト協会」(SAGB)を訪ね、そこで霊媒師としての理論、技術を学んだとされる。<sup>(1)</sup>

「心霊科学協会」については、江原は直接協会に所属していたかは定かではないが、やはり霊を肯定的にとらえることにおいては、共通した考え方もつ団体であると言えよう。

なぜなら、江原の霊魂観が、この協会を創設した浅野和三郎が主張する霊魂観とよく似ているからである。

本論文では、両者の霊魂観を比較し、その考え方の根本には、大正時代に大いに隆盛を極めた大本教とつながり、そしてそれは明治の近代化の中で成立していった古神道の考え方から来るものであることを明らかにし、そこから近代日本における霊魂観について見ていくこととする。

## 2、江原啓之の霊魂観

江原の霊魂観については、かれの『スピリチュアルな人生に目覚めるために』<sup>(2)</sup>という著作の第二章「人生の地図」を持つための八つの法則」の中から何うことができる。その法則の中から霊魂観に直接関わるところをまとめてみると、

1、靈魂の法則。

人はすべて靈的な存在であるから、死んで無になることはない。

靈界から見るならば、靈界こそが本当の世界であり、人は死んで魂は靈界というふるさとに帰る。

2、階層の法則

靈的世界は無数の階層に分かれている。死後、魂は成長のレベルに応じた境地に行く。人は物質界で肉体をまとい、ばらばらな存在であるが、靈的世界においては、「浄化向上を」めざし、究極的には一つのまつまりとなる。

たましいが死後たどる道筋は、人間は死とともに肉体という殻を脱ぎ、幽体と呼ばれる靈的エネルギー体に移行する。そして現実世界と、靈的世界の中間にある「幽現界」に行く。（ここに移行することを四九日、中有と考えている）

次にたましいは「幽界」へ向かう。この「幽界」には多くの階層に別れ、靈格が高いと高い層。低いほど低い層へと行く。「天国」と「地獄」はこの階層の違いを指している。

やがてたましいは「靈界」へと上昇する。このとき、たましいはみずからの「幽体」を脱ぎ捨てるため、この過程を「第二の死」と呼ばれている。

そして「靈界」へ行くと、たましいはみずからの類魂に帰結する。類魂と溶け合い、その一部となるが、現界で学び足りなかった部分をふり返り、再びこの世に再生する。たましいはこの「再生」と「帰結」をくり返し、最終的には光のエネルギー、大靈（グレート・スピリット）へと融合する「神界」へ向かう。

3、波長の法則

自分の心のあり方が出会う人や出来事を決めている。

人間が心に持つすべての思いは、想念という霊的なエネルギーを生み出す。この霊的波長を放って生きている人間は、現世に肉体をもたない靈魂にも影響を及ぼし、作用する。低いエネルギーを出していると「邪霊」、「未浄化霊」と呼ばれる低級霊と同調することになる。場合によってはそれが「憑依霊」となって、その人の生活や健康に悪影響を及ぼす。

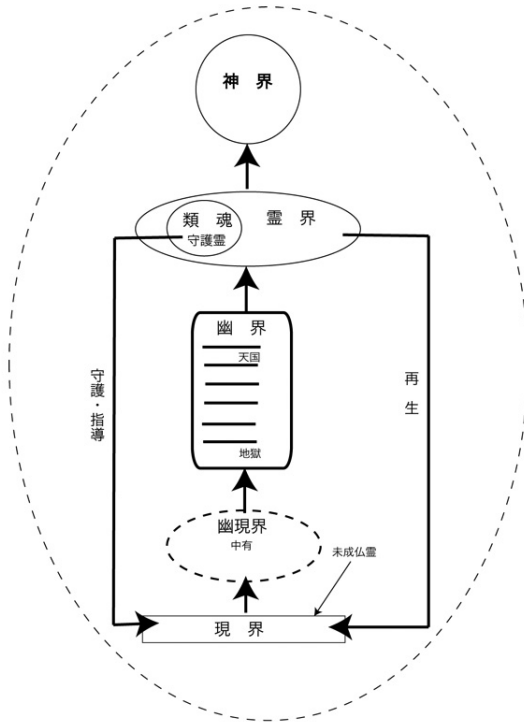
#### 4、守護の法則

人間はけっしてひとりぼっちで生まれてくるのではない。一人ひとりによって見守っている霊的存在がある。

その守護霊は複数いて、役割によって四種類に分類される。

- (1) 主護霊（ガーディアン・スピリット） 中心的守護霊。

- (2) 指導霊（ガイド・スピリット） 職業、才能、趣味を指導する靈魂。



(図1)

(3) 支配霊 (コントロール・スピリット) 人生において進むべき方向を調整する。

(4) 補助霊 (ヘルパー・スピリット) 以上三つの守護霊の手伝いをする。

#### 5、類魂の法則

霊的世界には「たましいの家族」なる存在がある。それが類魂 (グループ・ソール) である。誰もが霊界に、現世の家族以上に深い絆で結ばれた「たましいの家族」を持っている。

階層の法則のところで説明したようにたましいは霊界において類魂に帰結し、また新たに再生を繰り返していき、究極的には類魂全体が浄化され、「神」と一体となる。

守護霊たちもすべて類魂の一部分である。(図1)

### 3、浅野和二郎の霊魂観

次に、浅野和二郎 (以下浅野と略称) の霊魂観については、かれが昭和初期に発行した『心霊と人生』の中に、これまでの心霊研究を十九項目箇条書きにまとめたものがあり、その中から霊魂に関する項目を書き出してみると、

(五) 各人には各自の霊魂が宿っている。

(六) 各人には肉体の外に幽体、霊体、本体があり、それぞれ自我表現の機関となっている。

(七) 人間が肉体を放棄する現象を指して死と称しているが、その個性は死後にも存続する。

(八) 死後の世界は之を幽界、霊界、神界の三つに大別し得る。

(九) 各自の死後の生活に於て、幽界にありては主として幽体を機関とし、靈界にありては靈体、神界にありては本体を機関とする。

(十) 人間界と死後の世界とは適當の方法を講ずることによりて交通が可能である。<sup>(3)</sup>

また、江原が言うところの「波長の法則」については、次のように類似する考え方が見られる。

すでに幽明の交通がかく同一波長の共鳴を原則として居る以上、こちらの思念が清浄であれば清浄な靈魂又は神様に感応し、こちらの思念が汚れて居れば、汚れた悪靈、又は碌でもない動物靈など、感応します。<sup>(4)</sup>

「守護の法則」について見てみるならば、

さて私が使用する守護靈といふ言葉は頗る概括的のもので、要するに人間個々の背後に控え、大はその人の人格生命、小はその人の吉凶禍福又は事業等の指導に當る所の他界の居住者をひつくるめて指したものでありますが、くはしくその性質を調べて見ると大体之を三種類に區別する事が適當のやうであります。：

(一) 正守護靈(ガアデイアン・エンゼル又はガイド)

その人の全人格に對して責任を有する先天的の守護靈。

(二) 司配靈(コントロール)

靈媒現象の作製はもとより、その他もろもろの仕事をする時に人間の背後に控えて指揮斡旋の勞を執る

他界の居住者の総称。

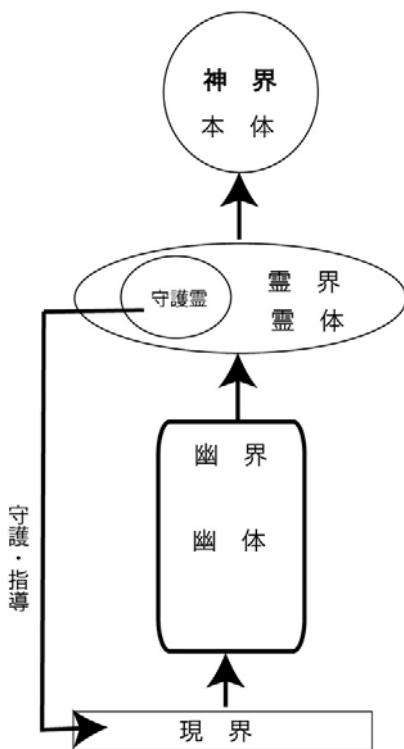
(三) 教導霊 (テイチャー)

新たに帰幽した人達の臨時の世話役であります。帰幽者の霊がまだ充分意識を回復しなかったり、まごまごして居たりする時に特別の世話をしてくれる他界のお役人達であります。<sup>(5)</sup>

さらに補助霊に関して浅野は、論文の最後のまとめで「正守護霊はその人の一生を通じて変更しないがただ仕事の関係から補助霊が沢山附くこともある」と述べていること<sup>(6)</sup>から、江原が言う「守護の法則」とほぼ考え方が一致することがわかる。

そして類魂の存在については明言してはいませんが、

本人の祈願その他は本人の自覚と否とに係わらず、常にその守護霊を経て霊界に通ずる。<sup>(7)</sup>



(図2)

と書かれているところから、江原が言う類魂の一部分である守護霊が霊界に存在することを示している。

以上、浅野が主張するところの霊魂観は、幽現界の有無、類魂の法則、守護霊の存在場所等の違いがあるが、江原が掲げる法則と基本的にはほぼ共通するものと言える。(図2)

#### 4、浅野和三郎の履歴と大本教

江原の霊魂観が浅野のものとはほぼ共通することが理解できたが、この霊魂観については、江原がイギリスで本場の心霊学を学んだことと同様に、浅野もイギリスの心霊学の知識から得ていたことから察するならば、かれらの霊魂観は、イギリスにおける心霊学の知識に依るところが大きいのかもしれない。ただし、江原の霊魂観の中で取り上げた「類魂」という考え方は実はイギリスの心霊学者であったマイヤーズの説とされるが、浅野の時代にはその概念ができていなかったようである。

浅野の霊魂観は確かにイギリスからの知識もあつたようだが、次に述べるように、それ以上に大本教、あるいは古神道からの影響が大きかったようである。

そこで浅野の来歴をふり返り、かれが大本教などから学んだ霊魂観について確認してみることとする。

浅野の履歴について、かれの著書『心霊主義』の裏表紙裏に書かれてあるものを参照する。<sup>(8)</sup>

明治七年に茨城県稲敷郡に生まれ、成長してからは東京帝国大学英文科を卒業した(指導教授は小泉八雲)。明治三十三年には海軍機関学校の教授となり、明治期の第一級の英文学者として活躍した。英文学者として日本初のシエークスピア全集がある。



大正四年、三男の原因不明の病気が祈祷師の祈祷によって治癒したことをきっかけに心霊問題に関心を抱くようになる。当時日本で霊魂の実践探求のメッカ大本教の綾部に移住。出口王仁三郎の右腕となり、たちまち大本教を隆盛に導き、他方一万人以上の鎮魂帰神指導をして後の心霊研究の貴重な体験と資料を得る。大正十年第一次大本事件で大本教を離脱。以後西欧の心霊科学の研究に全力を捧げる。

大正十二年、東京に「心霊科学研究所」を創立。月刊誌「心霊研究」（大正十五年「心霊と人生」と改称）の発行。昭和三年「第三回国際スピリチュアリスト大会（コナン・ドイル会長。於ロンドン）に日本代表で出席。帰途ボストン（北米）で霊媒マージャーリーを実験し幽霊の指紋を得る。昭和十二年没（六十三歳）まで、霊媒による心霊実験研究、西欧心霊科学の翻訳紹介、著述、講演、人生指導などの縦横の活動を続ける。

この浅野の履歴からわかるように、かれの心霊研究の礎は大本教での活動によって形成されている。また、逆に大本教の教義の作ったのも浅野の功績であると見られている。そのことは、大正九年に出された『世界十大宗教』の教外付録にある「皇道大本教」の項で

今日の如き隆盛を来さしめたる中心人物には教祖直子の外二人がある、一人は教主補たる出口王仁三郎で、今一人は前の海軍機関学校の教官文学士浅野和三郎其人で、<sup>9)</sup>：

と説明され、また来歴の項で「雑誌神霊界の発行をなし、彼の神論お筆先を一手で整理し更に皇道大本教の概要なる一書を著はし遂に大本教を大成して今日に至らしめし功労者である。<sup>10)</sup>」と教団外の人物からの評価からも

伺える。

## 5、大本教の靈魂觀

次に浅野が深く関わった大本教における靈魂觀とは、どのようなものであったのであろうか。

大本教は、教祖出口ナオが、明治二五年に突如神がかりとなり、当時信仰していた金光教の祭神である良の金神が自らに宿って、神勅が告げられていった。当初は金光教のもとで布教をしていたが、後に独立して大本教を立ち上げたのである。その頃、出口王仁三郎と出会い、かれによつて本格的な教団組織が作り上げられていった。『新宗教辞典』によるならば、大本教の教義の真髓は、「大本教旨」に示されている。

神は万物普遍の靈にして、人は天地經綸の主体なり。神人合一してここに無限の権力を發揮する<sup>(1)</sup>。

このように大本教では、人間は、全宇宙の經綸を行う主体であり実践者である。そして神の心を心とし、神靈をうけて神と一体になることで、人間は、經綸を実践する力をはじめて發揮できるとする。

また、その背景となる世界觀については、

全宇宙は、現界（形態界・顕界）と靈界（心靈界・幽界）が統合して成り立っているとす。目に見える現界は、目に見えない靈界の移写であり、靈界こそが実体界である。宇宙と同じく、ひとりの人間においても、靈魂が主で肉体は従であり、「靈主体従」が生死觀の基本と<sup>(2)</sup>されている。

また靈魂は一霊と四魂から成り立っており、四魂を練磨することが修行の目的としている。

一霊とは直魂なおひ（直日の霊）であり、これは魂の内奥にある至善至美の霊で、人間を誤らぬよう導き、過ちをおこした時には、省る働きをする。四魂とは、荒魂あらいたま、和魂にじ、幸魂まき、奇魂くしで、それぞれ「勇、親、愛、智」の働きをもっている。∴ 大本教では、「みたまみがき」（一霊四魂の練磨）を人生修行の眼目としている。<sup>(13)</sup>

以上、大本教の教義の一部を取り出したが、そこには、人間は靈的存在であること。世界は現界、靈界、幽界から成り立っていること。また直魂という指導靈の存在が示されていることを見るならば、浅野の靈魂観がここで結びつきあっていることが伺える。

浅野は、国家による大本教第一次弾圧事件（大正十年）の後、大本教を離れることとなる。一説には、宗教とは関係なく、純粹に心霊研究を目指したためであるとも伝えられる。

## 6、心霊学と古神道

さて、浅野の靈魂観には大本教の教義が係わっていることを前節で見えてきたが、この大本教の靈魂観は、さらに古神道の考え方から影響されているようである。

なぜなら、先に引用した教義の中にある「一霊四魂」説。あるいは大本教の実践法にある「鎮魂・帰神法」<sup>(14)</sup>は、出口王仁三郎がかつて出口ナオに出会う前に本田親徳流の鎮魂・帰神法を伝授されているところから来ているからである。

本田親徳は、文政五年に薩摩藩で生まれ、長じては江戸において会沢正志斎に入門し、和漢の学を学び、またその頃平田篤胤との関係もあったとされる。靈学研究に入ったきっかけは、京都滞在中に狐憑きの少女に会い、憑霊状態のなか、少女が若歌を詠むのに衝撃を受けたからだとされる。以後、靈学を究めるために古社、靈山に足を踏み入れ、古代神道の行法である「鎮魂・帰神法」を確立し、近代神道靈学の源流の一つとみなされている。鎮魂・帰神法について簡単に説明するならば、「鎮魂法が一種の精神集中技法であるのに対して、帰神法は神憑り状態を誘発させ、それをコントロールする技法<sup>(15)</sup>」であるとする。そして本田の言う帰神法とは、

施術者である審神者<sup>(さきにわ)</sup>と、被施術者である神主が対座して行われる。… 神主が印を組み黙想にはいると、審神者は石笛を吹き、おのずから幽玄なる雰囲気が醸し出される。このとき審神者が自分の霊魂を霊界なり神界に走らせ、神霊を自分の肉体に降臨させる。これを「霊を引く」というが、ここで神霊がそのまま審神者に降臨してしまうと、自分自身が神憑りになってしまうので、素早く神主に転送するのがコツだとされる。

こうして神主が神憑りになると、審神者は、憑依した神霊の種類を見分ける必要がある。この神の正邪、階級、系統を判定する行為を審神<sup>(16)</sup>という。

この鎮魂・帰神法の技術が出口王仁三郎に伝えられ、さらにその思想が浅野が自らの心靈科学に取り入れていたのである。

それは「審神者」という概念が、現在の「日本心靈科学協会」の事業として「靈能者および審神者(さにわ)の養成。心靈治療者の養成<sup>(17)</sup>。」と掲げてあることから察することができる。そして、ここでの審神者とは、

江原が行っているように相談者が憑いているところの霊（守護霊も含めて）を判断する能力を持っている者をさしている。

また江原自身も審神者の存在を肯定している。

理想の霊媒とは、能力と知恵の両方を絶妙なバランスの上で成り立たすことのできる人である、∴ 日本の心霊の伝統には「審神者」という優れた存在があります。審神者の祖は、『古事記』に描かれている竹内宿禰と言われています。∴

審神者の役割は、霊媒に降りた霊がどういふ霊で、その霊言が霊的真理に照らして正しいかどうかを見極めた上で、この世の言葉に解釈していくことです。役割の大きさから、審神者は霊媒より重要とも言われています。<sup>18)</sup>

ここから、現在活躍している江原はスピリチュアルカウンセラーとしゃれた名称を使っているが、その根本には、古神道の考え方が底流に流れていることの一端が見えてくる。

## 7、おわりに

古神道は、いわば本居頼長から平田篤胤へと続く国学の流れにあつて、それまで仏教教理を取り入れて発展してきた神道ではない、『古事記』『日本書紀』の時代に行われていた本来在るべき神道を復興した教えである、ということの名付けられたものであり、その教義は江戸末期から明治にかけて作られていった。

その古神道の教義は、明治時代においては、近代化という流れの中にあつて、取り残された形であつたが、大

正時代になると、大本教をはじめとして、この教えをもとにして心霊学というものが流行してくるのである。

それは、明治時代になり、近代化を進める国家にとって否定されてきた「迷信・まやかし」の類が、大正時代になり、物質的繁栄のみでは人間の根本問題を解決することができないという反省が見られるようになってきたからではないだろうか。

心霊実験で有名になり、そしてそのため東京帝国大学を追われることになった福来智吉が「日本心霊学会」から出された『現在及将来の心霊研究』に寄稿した序文に

心霊研究とは物質力以外、別に靈的力用の存在と其の働き方とを実験的に研究するものである。斯る研究は現代思想界の中心問題たる生命論に対して最も重要な価値を有するものである。……

自然科学其物は人生に必要な知識を供給するものである。併し其の知識は人生の意義に關するものでなくして、人生の意義を実現する為めの材料とすべき物質上の知識である。人生の意義は自然科学の供給する材料を利用して行く人間の精神其物の直覚自証によりて得らるべきもので、感覺主義の科学的觀察によりて到底察知し得べからざるものである。<sup>(19)</sup>

と書いてあることから、物質優先の科学から人間の精神についての探求へと人々の志向が向けられ始めたことが伺える。

しかし、その心霊学は、本田親徳の教えをそのまま示していくのではなく、やはり西欧の哲学や科学的知識を盛り込みながら、いかにも理論武装をした学問として世の中に現れてきた。そのことは浅野の著作だけでなく、

やはり大本教から独立した友清歆真の『霊学筌蹄』や後に野口整体として有名な野口晴哉が教わったとされる松本道別の『霊学講座』をひもとくならば、そこには、本田流の古神道の考え方の上に、当時最先端の心理学、医学、哲学の専門用語がちりばめられて心霊学について述べられていることが見られるからである。

そこに書かれてあることはある意味、現代から見ると相当いかかわしく感じられるが、その当時の人間としては、おそらく霊魂の行方というものを近代的学問理論によって必死に証明しようとしたのではないだろうか。

この物質主義から精神主義への変化は、現在にも共通する問題でもある。経済中心の物欲優位の世界が崩れつつあって、明日に希望を持つことが難しくなった現代にあって、人々は人間の行くべき道しるべを示してくれるものにすがりたくなる。それに対して、人間は霊的存在であり、この世の苦しみはすべて霊魂の修行のためにある、と明確に示す江原のような霊媒師が受け容れられるのも当然かもしれない。

しかし現代の日本仏教は、葬儀、法事、そしてお盆、施餓鬼の法要等、日頃行なわれている仏教行事すべて、日本人が持つ霊魂観抜きにして成り立たないのに近代仏教学の影響のためか、現代人に、輪廻する主体などない、霊魂など無く、縁起の世界ではすべて空である、と主張しても、何ら人々の心の琴線に触れることはないだろう。

我々はもう一度、日本人の霊魂のあり方について、ただ教義のみに囚われるのではなく、実践を通して、真剣に考えてみる必要があるのかもしれない。

註

- (1) 江原啓之『スピリチュアルな人生に目覚めるために―心に「人生の地図」を持つ―新潮社 二〇〇三年十月、江原啓之のウィキペディア (<http://ja.wikipedia.org/wiki/江原啓之>)
- (2) 江原啓之 同書八十頁～一四七頁
- (3) 『心霊と人生』第七卷第五号「心霊研究と信仰問題」三～四頁 昭和五年五月
- (4) 『心霊と人生』第十一卷第二十号「心霊常識の養成」九頁 昭和九年十二月
- (5) 『心霊と人生』第八卷第五号「守護霊につきて」九～十頁 昭和六年五月
- (6) 同十七頁
- (7) 同十七頁
- (8) 浅野和三郎『心霊主義』でくのぼう出版 二〇〇三年一月
- (9) 伊藤円定著『世界十大宗教』八五三頁 日本禅書刊行会 大正九年
- (10) 同八五五頁
- (11) 松野純考編『新宗教辞典』四十一頁 東京堂出版 昭和五十九年
- (12) 同四十三頁
- (13) 同頁
- (14) 第十一條 我等は日夜鎮魂婦神の神法を修行して心身の邪氣を払拭し天賦の真心に帰る時は生きながら尊き神格を具
- へ天地に代るべき大効を永遠無窮に樹立し得べきものたる事を確信す。(『世界十大宗教』八七一頁)
- (15) 『古神道の本 甦る太古神と秘教霊学の全貌』三十二頁 学習研究社 一九九四年
- (16) 同三十三頁
- (17) 財団法人 日本心霊科学協会 HP <http://www.shirei.or.jp/jigyou.html>
- (18) 『スピリチュアルな人生に目覚めるために』二二二頁
- (19) 日本心霊学会『現在及将来の心霊研究』日本心霊学会本部 大正七年 序一～三頁
- 参考資料
- 津城寛文『霊』の探求 近代スピリチュアリズムと宗教学』春秋社二〇〇五年十月
- 松本道別『霊学講座』八幡書店 平成二年八月
- 春川栖仙編『心霊研究辞典』東京堂出版 一九九〇年八月
- 友清欲真『霊学筌蹄』天行居 大正十年
- 浅野和三郎『大正維新の真相』大日本修齊会 大正八年
- 上田正昭編『みろくの世』―出口王仁三郎の世界』天声社 二〇〇五年八月
- 〈キーワード〉スピリチュアル 心霊学 浅野和三郎